

津田梅子

(つだ・うめこ)

1868年明治維新になり、それ以後日本の近代化が急速に進められていったが、女性の地位は昔と同じように男性よりずっと低かった。ヨーロッパやアメリカを旅行し、いろいろ見聞きして来た明治政府の指導者の一人は、アメリカの女性には教養があり、その社会的地位も高いのに驚き、次のように考えた。「立派な人間を育てるのには、家庭にいて子供の教育をする母親に教養がなければならぬ。教養のある母親をつくるためには女子教育をさかん^せにせねばならぬ。そのためには、女性を外国に留学させるべきだ」

彼の述べた意見にもとづいて、政府は早速女性を何人か外国に留学させることにした。

1871年、5人の若い女性がアメリカに送られた。そのなかに、7才になったばかりの津田梅子という女の子がいた。彼女はワシントン郊外のジョージタウンに行き、そこでアメリカの自由な教育を受けることになった。

梅子は11年間アメリカで勉強した後、1882年日本に帰ったが、梅子を待っていたのは、未だに女性の地位が極端に低い日本の社会と、女性に対して保守的な考えを持っていた父親の封建的な態度だった。梅子の父親は、二度も外国にいった経験があり、進歩的な男性のはずだったが、梅子に対しては厳しく、自分に服従することを始終強制した。

帰国してから3年後、政府の重要な仕事をしている人から、ある学校で英語教師の仕事してみないか、という話があった。梅子は、ちょうど父親の態度に抵抗を感じ、家を出たいと思っていたところだったので、すぐにその仕事を引き受けた。ところが、その学校の教育の目的が、夫に従う良い妻、家庭にいて子供を立派に育てる母親をつくること、つまり従属的女性をつくることだったので、アメリカで一緒に生活した家族から愛と信頼を受けて自由な雰囲気の中なかで大きくなった梅子には働きにくかった。

アメリカでの自由な生活が忘れられない梅子は、再びアメリカで勉強しようと、1889年フィラデルフィアの近くにある布林マー・カレッジへ留学し、そこで3年間生物学を勉強した。アメリカで生き生きとした女性の生活をみれば見るほど、日本の女性の地位を向上させる必要性を痛感し、日本に帰ったら、女性達のために仕事をしようと決意した。

1892年に帰国したが、その頃日本には女性が高等教育を受けることができる学校は一つだけしかなかった。そこで、梅子は、自分で自由な教育ができる学校を作ろうと考え、8年後にとうとう東京に「女子英学塾（じょしえいがくじゅく）」という私立の大学をつくり、女性達の教育をはじめた。その学校が、今、日本で最も有名な女子大学の一つである「津田塾大学（つだじゅくだいがく）」になったのである。

明治維新 - Meiji Restaurationen	保守的な - konservativ	雰囲気 - atmosfære
地位 - position, status	封建的な - feudal	再び - igen
政府 - regering	態度 - holdning	生き生きとした - livlig
教養 - dannelse	進歩的な - progressiv	向上 - højne
驚く - blive overrasket	服従 - lydighed	必要性 - nødvendighed
教育 - uddannelse	始終 - altid	痛感する - føle stærkt
べきだ - bør	強制する - gennemtvinge	決意する - beslutte sig for
にもとづいて - baseret på	抵抗 - modstand	高等教育 - højere uddannelse
未だに - selv nu	引き受ける - påtage sig	
極端 - ekstremt	従属的 - underkastet, afhængig	

つだ うめこ
「津田梅子」

ねん めいじいしん いご にっぽん きんだいか きゅうそく すず
1868年 明治維新になり、それ以後日本の近代化が急速に進め
じよせい ちい むかし おな だんせい ひく
られていったが、女性の地位は昔と同じように男性よりずっと低かつ
りよこう みき き めいじ せいふ
た。ヨーロッパやアメリカを旅行し、いろいろ見聞きして来た明治政府
しどう しゃ いちにん じよせい きょうよう しゃかいてき
の指導者の一人は、アメリカの女性には教養があり、その社会的
ちい たか おどろ つぎ かんが
地位も高いのに驚き、次のように考えた。

りっぱ にんげん そだ かてい こども きょういく ははおや
「立派な人間を育てるのには、家庭にいて子供の教育をする母親に
きょうよう きょうよう ははおや じよし
教養がなければならぬ。教養のある母親をつくるためには女子
きょういく じよせい がいこく りゅうがく
教育をさかんにせねばならぬ。そのためには、女性を外国に留学さ
せるべきだ」

かれ の いけん せいふ さつそくじよせい なんにん がいこく
彼の述べた意見にもとづいて、政府は早速女性を何人か外国に
りゅうがく ねん にん わか じよせい
留学させることにした。1871年、5人の若い女性がアメリカに
おく さい つだ うめこ おんなのこ
送られた。そのなかに、7才になったばかりの津田梅子という女の子が
かのじよ こうがい い
いた。彼女はワシントン郊外のジョージタウンに行き、そこで
じゅう きょういく う
アメリカの自由な教育を受けることになった。

うめこ ねんかん べんきょう のち ねん にっぽん かえ
梅子は11年間アメリカで勉強した後、1882年日本に帰ったが
うめこ ま いま じよせい ちい きよくたん ひく にっぽん
、梅子を待っていたのは、未だに女性の地位が極端に低い日本の
しゃかい じよせいにたい ほしゆ てき かんが も ちちおや ほうけんてき
社会と、女性に対して保守的な考えを持っていた父親の封建的な
たいど うめこ ちちおや にど がいこく けいけん しんぽ てき
態度だった。梅子の父親は、二度も外国にいった経験があり、進歩的
だんせい うめこ にたい きび じぶん ふくじゅう
な男性のはずだったが、梅子に対しては厳しく、自分に服従すること

しじゅうきょうせい
を始終 強制 した。

きこく ねんご せいふ じゅうよう しごと ひと
帰国してから3年後、政府の重要な仕事をしている人から、ある
がっこう えいご きょうし しごと はなし うめこ
学校で英語教師の仕事をして見ないか、という話があった。梅子は、
ちちおや たいど ていこう かん いえ で おも
ちょうど父親の態度に抵抗を感じ、家を出たいと思っていたところ
だったので、すぐにその仕事を引き受けた。ところが、その学校の
きょういく もくてき おとにしたが よ つま かにい こども りっぱ そだ
教育の目的が、夫に従う良い妻、家庭にいて子供を立派に育てる
ははおや じゅうぞくてきじょせい
母親をつくること、つまり従属的女性をつくることだったので、
いっしょ せいかつ かぞく あい しんらい う じゅう ふんいき
アメリカで一緒に生活した家族から愛と信頼を受けて自由な雰囲気の
おお うめこ はたら
なかで大きくなった梅子には働きにくかった。

じゅう せいかつ わす うめこ ふたた べんきょう
アメリカでの自由な生活が忘れられない梅子は、再びアメリカで勉強
しょうと、ねん ちか
1889年フィラデルフィアの近くにある
りゅうがく ねんかん せいぶつがく べんきょう
プリンマー・カレッジへ留学し、そこで3年間生物学を勉強した
いきい じょせい せいかつ み にっぽん
。アメリカで生き生きとした女性の生活をみれば見るほど、日本の
じょせい ちい こうじょう ひつようせい つうかん にっぽん かえ じょせい
女性の地位を向上させる必要性を痛感し、日本に帰ったら、女性
たち しごと けつい
達のために仕事をしようと決意した。

ねん きこく ころにっぽん じょせい こうとうきょういく
1892年に帰国したが、その頃日本には女性が高等教育を
う がっこう ひと うめこ
受けることができる学校は一つだけしかなかった。そこで、梅子は、
じぶん じゅう きょういく がっこう つく かんが ねんご
自分で自由な教育ができる学校を作ろうと考え、8年後にとうとう
とうきょう じょし えいがくじゅく しりつ だいがく
東京に「女子英学塾（じょしえいがくじゅく）」という私立の大学
じょせいたち きょういく がっこう いま にっぽん もっと
をつくり、女性達の教育をはじめた。その学校が、今、日本で最も

ゆうめい　じょしだい　がく　ひと　　つだじゅくだいがく
有名 な女子大学 の一つである 「津田塾大学 (つだじゅくだいがく) 」
になったのである。